

日風堂周

第1号 1991年9月1日

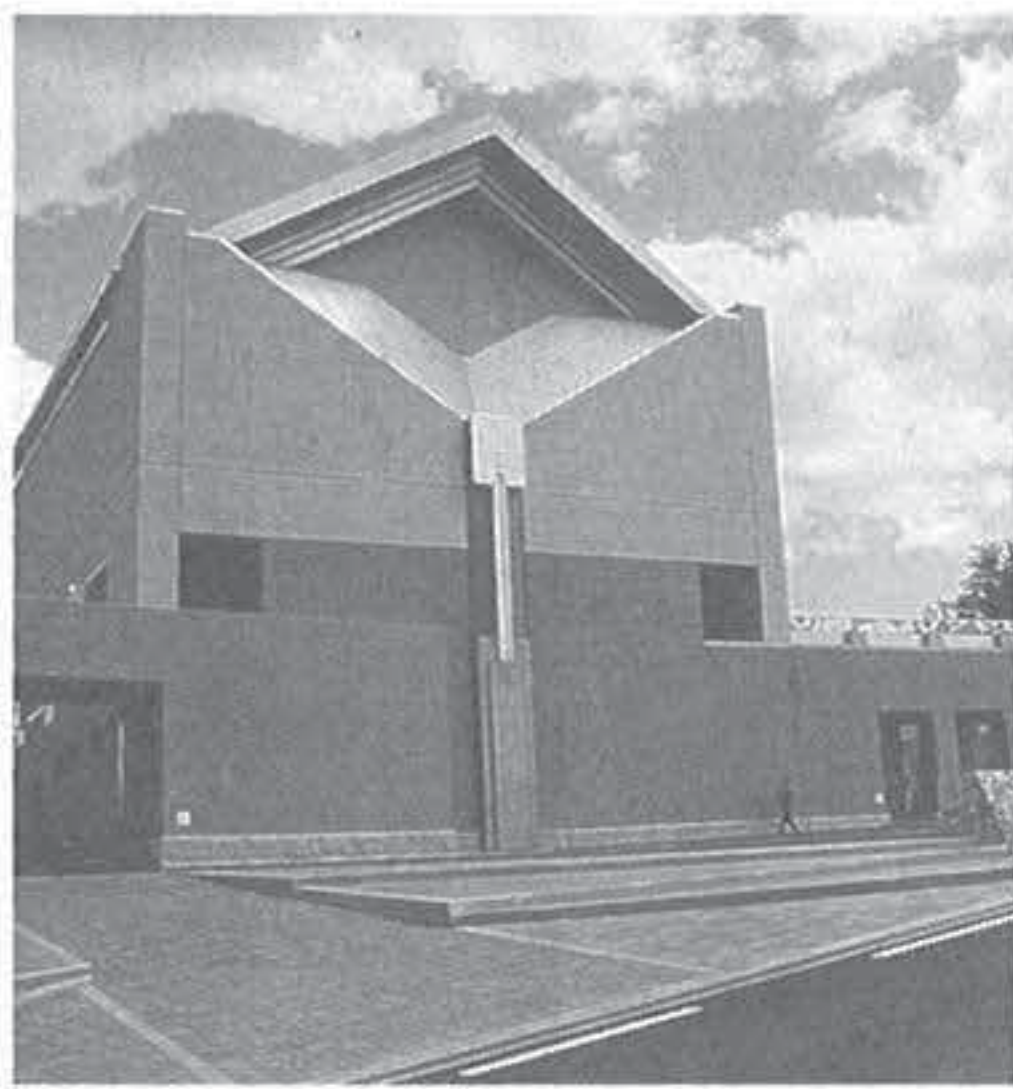
坂路からのあこがし

館長 吉村 淑甫

資料館への坂路は大きく二度迂回している。その坂路を中ほどまで登っていると、もう息切れして、つい傍らの木蔭に寄ってゆく。舗装された綺麗な道だが、わたしにはきつい。後から後から若い人の車が上ってゆく。

中ほどから少し上った右手の山側に、何本かの楊梅の木がある。なかの一本はかなり大きい。根元のまばらな草生の斜面に、ぼとぼと鶯色の実が落ちていっている。あそこまで行けばもうすぐ草屋根の民家造りが見えてくる。そう思って歩きはじめる。

楊梅の木の下に来て、熟した実の一つを拾い、土を払って口に入れる。やはり楊梅は梅雨の果実だ、と当り前の



感想をいづく。

楊梅の実が落ちつくした頃からこの坂路が急に暑くなる。かつての草道がすっかりアスファルトの下にとじ込められて炎暑を噴き出しはじめるのだ。かつて元親もこの坂路を登った。彼の晩年もどうやら息切れした晩年だったナア、と思う。

昨日、文部省の若い役人から「生涯学習」の話を念入りに聞かされた。だが、わたしには十分にはのみ込めなかった。

資料館に来て、初めてさまざまな展示品を見た時、わたしがいちばん学問的興奮を覚えた、否、美的興奮といったほうがよい。それはなんだったか。考古資料のなかに宿毛貝塚の一部を切りとってきて平面化し額にいれた遺物を見たことだった。何故それに美的興奮を覚えたか、わたし自身わからない。しかしその興奮は今もつづいている。貝塚は古代の人たちが、喰べた貝の殻を一カ処に捨ててあるというだけのものだ。それになんて興奮するのかわからない。

明治の初め、アメリカから日本政府

に雇われてきたモースという学人がいた。ご承知の大森貝塚の発見者である。この人は僅か三年くらいしか滞在しなかった。その短い間に江戸から明治へかけての庶民の生活道具を、たとえば、ちびくれて足形のついたままの下駄とか、たった今、下町住いの侍の家の娘が喰べた膳部とか、あるいは、ちいさな子どもがそこに来て掌を合わせた地藏さんの前の欠け茶碗。さらにご新造のお歯黒の歯型や、かんざし。裏店の駄菓子屋の看板類。そんならちもない生活用具の数々をモースは数え切れないほど蒐めた。それらの品々が最近日本へ持って来られて展示された。実にそれはわれわれにとって、切ないといえ切ないものばかりなのだが、百年も前の人たちの生活が昨日の日のことのように思い出されるものばかりであった。

「生涯学習」などという言葉は、どうもわたしには馴染めない。一生懸命強などできるものか、と思う。この日本という国の、これは、いわば流行の平和論の一つかもしれない。

一つの遺品・遺物が一人の感動を呼びますことが、わたしにはもっと大切だ。学習してできるものではない。そんなこんなをかんがえながら、今日もまた坂路を上って行く。

(平成3年6月29日)

開館記念展によせて

中谷宇吉郎から寺田寅彦への手紙

高知医科大学名誉教授 上田 壽

今回の寺田家資料の中に、世界で初めて人工雪の結晶を作って有名になった中谷宇吉郎博士が、恩師の寺田寅彦先生に送った手紙の一つが見つかったが、便箋六枚に亘る長文のものである。

中谷氏の書いた岩波文庫の「雪」の「第三話 北海道に於ける雪の研究の話」の中で同氏は北海道大学の廊下の

片隅で冬の厳寒の最中に顕微鏡と小さい実験台で雪の結晶の写真を写して研究を始めているが、それは米のベントレーが一九三一年に「snow crystal」を出版した翌年からとあるので、一九三二年（昭和七年）からということになる。

又、つぎの冬の正月休みの前、つまり一九三三年暮に、冬の十勝岳で雪の結晶の写真撮影をしようと思いついて、山林監視人のヒュッテの白銀荘に泊り込んで観測を始めている。手紙の日付は一月十六日になっているものの、年号が入っていないが、十勝岳に行ったのは一九三四年の一月ということになり更にその年に二回、次の年（一九三五年）三回という風に度々行っている。

る。前記寅彦宛の手紙にはこう書かれている。「私共は十勝岳に十二日迄居て、土曜日に帰って参りました。東一さんも至極元気でしたから御安心の程願います。」これは何度目に行った時の話かわからないが、一九三四年から一九三五年頃のことであろう。

その手紙の中で「硬化油の中で零度以下で雪の結晶を固めて雪の化石を作ることを試みて大分色々やってみましたがどの油も極めて少量は水を溶かすらしく四五日すると消えてなくなってしまうましたが（中略）今度は何とかして常温になってもいい様に固めてしまいたいものと思つて居ります。出来ましたら最初の雪の化石を一つ御贈呈申し上げたいものと思つて居りますが之は餘り當にしないで御待ち下さいませお願い致して居ります」という、いかにもユーモアと、ほのぼのとした師弟の関係が偲ばれる一節である。

又、雪の結晶は普通六角形といわれているが、その成因が二つの核から発した雪花の組合せによるため、色々な形のもので出来ることがわかったこと

とはかなりの収穫であったと喜びの報告もしている。雪花の説明は、中谷氏の「雪」の随筆の中に詳しく述べられている。

更に積雪の結晶についても今度初めて組織的に調べた結果、上層では雪の結晶は原形を止めているが、下に行くほど鋭いエッジが昇華して、五十センチメートルも中に入ると粒状になり、その経過がよく見られたとある。

霜についても調べており、予想もしなかった珍しいもの、例えば洋酒の六角形のコップのような物をはじめ、沢山の形のものがあることがわかって愉快であったので、早速実験室内で真似て作って見ることにして居りますと述べている。

文中には十勝岳の山小屋の番人が、樺太（現・サハリン）へ船で渡りそこからカムチャツカまで、凍ついた海を歩いて一人で渡った話なども面白く出てくる。

中谷氏は十勝岳における天然雪の研究から、実験室内で人工的に色々な形の雪の結晶を作る研究に移行している。

一九三六年二月に北大に出来上がった、最低零下五十度まで冷やせる実験室で、通常は零下三十度位の室温で実験を始めているが、それはこの手紙より後のことである。人工雪のことについて少し触れてみると、先ず人工的に

霜の結晶を作ることから始めて、これは割合簡単に出来ているが、雪の結晶を作ることは難しかったようである。

それは雪の結晶が出来るときには、中心的な役割をする核の存在が必要なため、その発見に苦労している。彼は

種々の小さい糸を吊るしてそれを核として雪の結晶を作ることを試みたが仲々うまく行かなかった。たまたま兎の小さい腹毛を使うと非常にうまく出来たのでよく調べてみると、兎の腹毛にはところどころ瘤があつて、それに氷附着して小氷塊になり、それが益々生長して雪の核になることがわかった。

気温や湿度など気象条件を色々変えてやってみると天然雪の中に見られると同じような色々な形の雪の結晶を作り出すことが出来るようになった。その時の得意さと感激は我々にもまじかに伝わってくるような気がする。中谷氏は「つまり雪は高層においてまず核が出来それが降下する途中で各層において、それぞれ異なる成長をし様々な結晶形や模様が出来るとすれば、実験的にそれらの出来る条件を知っておけば、逆にその形の雪の降った時の上空の気象状態を類推することが出来る筈である。このように見れば雪の結晶は、天から送られた手紙であるということが出来た。そしてその中の文句は、結晶の形及び模様という暗号で書かれて



寺田 寅彦

いるのである。その暗号を読み解く、仕事が即ち人工雪の研究であるということも出来るのである」と書いてある。この「雪の結晶は天から送られた手紙である」という句は私の大好きなところであり、自然科学を研究する者の基本的な態度を述べたものと云える。

私の研究してきた煙の拡散の問題においても、煙突から出る煙のさまざまな形は拡散係数によって支配されるが、拡散係数は気象状態によって変わるものである。つまり煙の形を解析することによって逆に拡散係数を知ることが出来る筈である。自然界は煙によってすでに事実を提供してくれておりその鍵を解くのが研究者の能力であり使命といえよう。

こんどの中谷氏の手紙は彼のライフワークとなった雪の研究の途中の段階で恩師寅彦先生に出した興味深い、貴重なものと云えるだろう。

(平成3年7月7日)

企画展示室から

第一回寺田寅彦展

出品資料の多くは寺田寅彦のご遺族、関係者から県に寄贈、寄託いただいた資料で、寅彦愛用の楽器、自筆の生原稿、自ら絵筆を握って描いた油絵、水彩画、また夏目漱石とのやりとりをうかがわせる書簡、絵はがきも公開した。

寺田寅彦は、物理学者としての業績が目だって評価されているが、吉村冬彦として多くの随筆を書き、夏目漱石から手ほどきを受け、俳句をたしなむなど幅広く文筆活動も行っている。今回の展示では初版本の随筆集も出品された。また、物理学における弟子宇田道隆も俳句を趣味とし、寅彦に俳句の添削指導を受けている。

中学生のころからヨーロッパの画集を取り寄せるなどして絵の世界に興味を持ち始めた寅彦は、それらの画集を座右におき模写をした。その絵の一部も今回公開した。

大学生の時、肺をわずらい高知の須崎で療養をしていたときに描いた淡い色彩の水彩画も人々の目を引き付けていた。

会期は開館日の五月三日から七月十四日。入場者数は三〇四八人であった。

(学芸主事 森本満子)

開館記念特別展
「第一回 寺田寅彦展」
内なる世界の具現

出品目録 1991. 5. 3~7. 14

〈油彩〉

母の像
貞子像
山湖
日暮里風景
浦和風景
成増風景A
ばらA
蓄音機を聴く
伊万里
浮世絵の女
志村風景A
腰かける弥生A
赤松林
自画像A
自画像B
自画像C
赤い花
山門
正二(未完)
塩原風景

花C
シネラリア
海をみる人
海岸人物二人
須崎台場
江ノ口川川口
新莊川口
人物読書
種崎より桂浜
須崎にて
久万山
橋のある風景
風景、右に大木
高知にて
門前一面の出水
幻想風景(海)
幻想風景(人物)
レストランA
レストランB
二階よりE
二階よりD
ヤツデのある庭
中庭隅
中庭花壇
庭隅B
庭の花壇A
蔬菜A
静物
もみじ
妻

〈水彩画〉

シクラメン
切り花
スイートピー
なすびの花
ひょうたん型花瓶にけ
しとのうぜん
むくげと日日草
花瓶と花
ひなげし

〈色紙〉

腰かける弥生B
シャボン玉
姉妹A
舟
海岸の塔
海岸絶壁
奇岩のある風景
波打際

〈その他〉

チェロと弓
ヴァイオリンと弓
蓄音機
SPレコード:「リエンツィ」序曲「魔王」悲愴」
書籍(初版本):「続冬彦集」
「俳諧論」「蒸発皿」「蛍光板」
「觸媒」
小説「やもり物語」原稿
漱石から寅彦あて書簡
M40. 9. 8
漱石から寅彦あて絵はがき(六通)
寅彦から宇田道隆あて書簡
T13. 12. 27 T8. 2. 4
T8. 4. 5 T8. 7. 3
T9. 5. 7
寅彦による宇田道隆の俳句
添削S8. 9. 10 S8. 10. 11
いちご図風呂敷

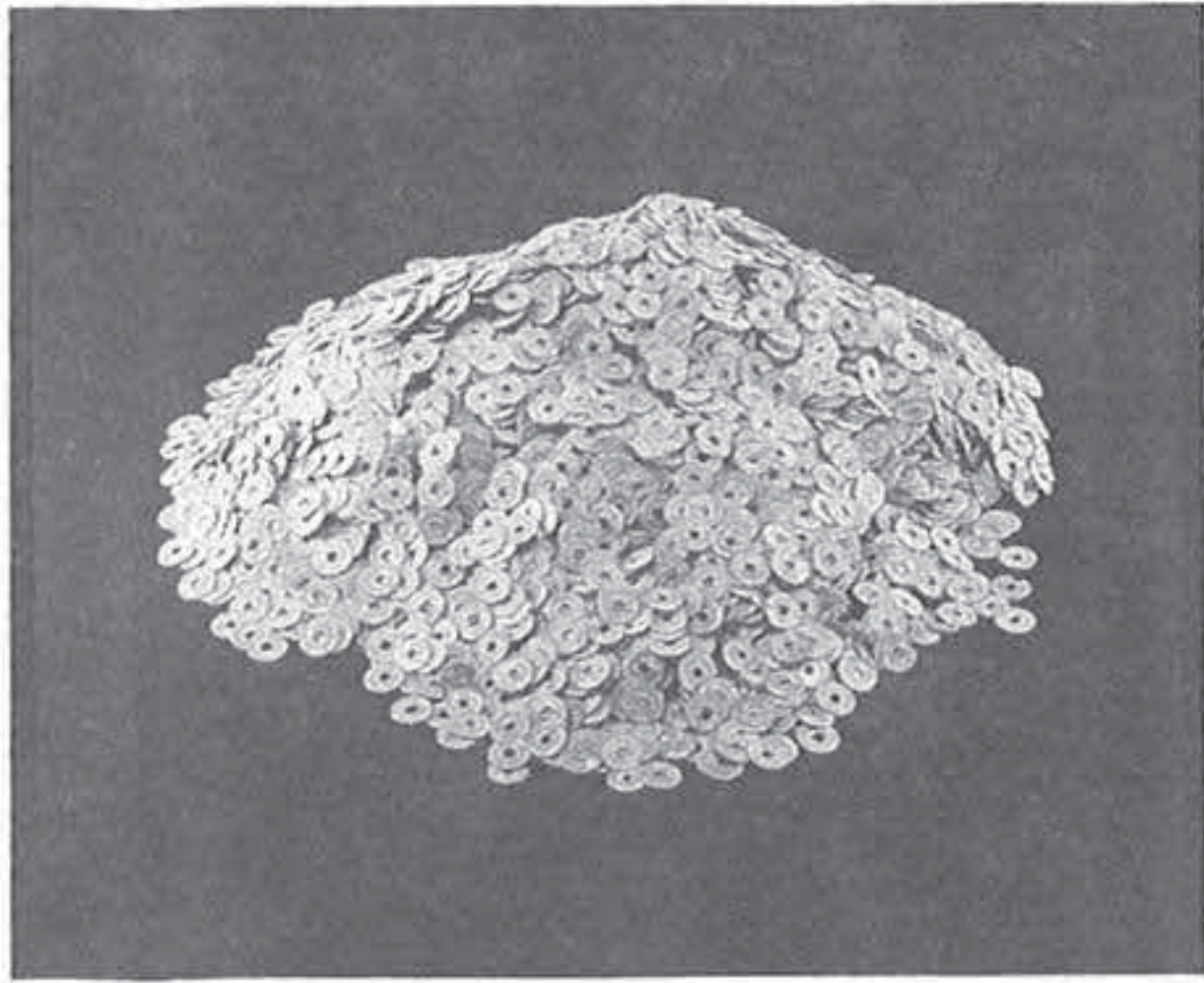
資料紹介

高知市東久万出土の渡来銭

昭和36年2月、宅地の造成中、大きな甕かまに入った大量の古い銅銭が現れた。重さにして262・5kg、総数は約7万枚にもものぼるもので、発見者たちはさぞ驚いたことと思われる。

その大部分は中国から輸入されたもので、一部日本、朝鮮のものもあり、全部で60種類におよんでいた。現在、輸入された銭貨を渡来銭と呼んでいる。最も古いのは前漢の半両で紀元前175年のもの、最も新しいのは元の至大通宝で西暦1309年に造られたものであった。

このことから甕が埋められたのは1



渡来銭

309年、鎌倉時代の末期以後で、この後莫大な量もたらされる明の永楽通宝の入る以前の、室町時代前期までの頃とみられる。

日本では皇朝十二銭が造られているが、地方には十分及ばず製造が中止されている。そして平安時代の後半頃からは、中国から銅銭を輸入し用いるようになったのである。

さて東久万の銅銭は、誰が何の目的で埋めたのだろうか。残念ながら、今のところは不明で、今後の発掘調査や資料の発見などを待つしかないのである。しかし、14世紀前半に大量の銅銭を蓄えられる財力をもった豪族がこの地にいたことは確かなのである。

これら銅銭の一部は、歴民館の総合展示室において見ることが出来る。昔の中国で造られた古銭が、はるか土佐にまでもたらされ、それを中世の豪族が甕につめて埋めた背景にはどのような事情があったのだろうか。しばし、想像をめぐらしてみるのも楽しいことである。

(学芸主事 梶原瑞司)

物部の仮面

企画展示コーナーでは、年に2、3回テーマを変えて展示を行っていく予定だが、1回目は物部村の仮面を紹介している。

物部には50におよぶ仮面があるといわれているが、今回展示してあるのは岡の内と大西で収集された2組15面である。来歴や使用法がわからなかったので現地で聞き書きをおこなった。



岡の内の面

をしたときの2回しか面を見たことがなく由来はほとんどわからなかった。一方の岡の内では、面を持っていた家は転出しており、ここでも何も聞けなかった。

物部村の各地には、このように仮面を代々祀り続けている家が散在している。しかし、この数十年来の過疎による家の転出や老人たちの死によってその由来や信仰はわからなくなっている。

だが、今も何軒かの家は昔ながらのやり方で面を祀り続けており、そのよる家で聞き取りをすることによって展示してある面がかつてどのようなものとして考えられていたのか類推することが出来る。物部村では仮面は非常に神聖視されており、けがれから遠ざけて大切にしまわれている。面は何か気に入らないことがあると箱のなかでコトコト音をたてたり箱からとびだしたりするといわれ、たいへん畏れられている。そして、何十年に一度の大きな祭りのときは、役者がかぶって劇をするのにもちいられる。主役は「炭焼きの五郎」であり、五郎の嫁取りの様子がおもしろおかしく演じられたという。ふだんは畏れられる面も祭りの日には人々の笑顔を浴びる。

展示してある仮面もかつては人々の畏れと笑いとともにあったのであろう。

(学芸主事 梅野光興)

研究ノート

一九九一年の伝承

梅野 光興

山間のある村で明治43年生まれの人から木材の運搬について聞き取りをしていたときのことである。その老人が「これだけは覚えておいてほしい」というようないいみみのことを言っていて次のような事柄を話しはじめた。

この集落は平家の開いたところである。もとは学校のあるところに広いアオアオとしたヌタ（沼）があった。そこに大蛇がおって赤い舌をペロペロ出して泳ぎよった。今食堂のあるところの向こうに住んでいた侍が、犬を七匹連れて関の小刀をくわえて七日七晩泳いだら大蛇は逃げていってしまった。追い出された大蛇は、途中あった石に七巻き半まきついた。その石は「ワレ石」という。蛇は、安芸のどこやらへ行こうか、讃岐の満濃池に行こうかと思案したが、結局安芸へ越していった。蛇のおったところは広い田んぼになった。

これは、もちろんこの集落の開発伝承である。大いなる自然（象徴としての

蛇）を征服し、人間が文化（田）を作り出すというテーマが語りこまれていく。だが、そのような分析はともかくとして、この伝説を語ってくれた老人の「これだけは覚えておいてほしい」とは、いったいどういうことなのだろう。

高度経済成長を経て日本のムラは大きな変貌を遂げていった。暮らしは豊かになり、電話や自動車など通信や交通手段の発達、かつてのへき地を身近な場所に変えてしまった。中央の文化はテレビを通して瞬時に入り込み、流行も話題も風俗も考え方にいたるまで全てが都市と同じになっていった。一方では、ムラ人たちは都会へ出ていき、ムラで生活する人はすっかり減ってしまった。特に山村の過疎問題は深刻である。生活様式の変化というよりムラ自体が消えてしまったところさえある。かつての生活は急速に失われていく。

「これだけは覚えておいてほしい」と語った老人も、このような状況を見

てつい話しておきたくなったのだろう。老人のいるムラも、世代が替わり家が変わって地つきの伝承を知っている者もすっかり少なくなっている。今のうちに語り残しておきたい。しかし老人が選んだのは教訓譚でも生活の知恵でもなく、現代社会に生きる私達にとっ

てはお伽ばなしにも似た伝説であった。だが、何十年もその土地で生活してきた人々にとっては、それはただのお伽ばなしではないのである。この物語は、遠い先祖がこの土地に田を開き人が住めるようにしたのだという輝かしい記憶であり、その土地をもとの荒れ地に戻さぬように尽力してきた人々の精神的支柱として何世代にもわたって

伝承されてきたに相違ないのである。しかし、その伝説は今失われようとしている。伝説が忘れられることは、伝説を支えてきた人々の歴史が忘れられることでもある。長い人々の苦勞を忘れた人々は、それを知る人々より、ムラを荒れ地に戻すことに抵抗が少ないかもしれない。老人はそのような状況が残念だったのであろう。

このような状況に対して私たちはどのようなことができるのであろうか。大規模な民俗資料調査や民俗芸能の保存継承運動、民俗資料館による民具の収集保管、民話集伝説集の作成、こ

ういった事業は各地で盛んにおこなわれている。各市町村や国レベルの事業としてあるいは研究者の手によって、民俗の記録保存はおおいに盛んである。

じつは、老人が伝えたいと思ったこの伝説も、すでに誠実な民俗学者の手によって書物に記録されているのである。「ワレ石谷」とタイトルをつけられたこの伝説は、この地方に語り継がれた他のたくさんのお伽ばなしのなかにもその内容をとどめている。筆者はすでにこの本を読んでこの伝説のことは知っていたのである。

けれどもそのときは、伝説を実際に伝えている人のことなど知るよしもなかった。伝説の内容自体は記録できてもそこにこめられた人の思いまでは、なかなか記すことはできないのだ。

だがもう一度老人の言葉にかえると、「これだけは覚えておいてほしい」というのは、蛇退治の物語自体というより、これまでに私たちがみてきたような、伝説にこめられた人々の生であったはずだ。私たちは、昔話や伝説を本にまとめ民具を資料館にかざれば、伝承を保存できると勘違いしている。それだけではなく、その背後に生きてきた人々の姿をこそ透視しなくてはならないのである。

本棚

『田野町史』

(田野町史編纂委員会)

昨秋、全七編からなる大著『田野町史』が刊行された。同町史近世編は、歴史民俗資料館開設に当っても大変お世話になった依光貫之・高橋史朗両氏の共同執筆になるものである。ここに両氏へのお礼の意味も込めて、御著作の書評を述べさせて頂くことにする。

過日、私が、両氏と面談できた時、「畏れ多くも、両先生の大作の書評を書く羽目になりました。」と言うと、依光氏は、「いかにも高校教師が書きそうな文でしょう。」と答えられ、高橋氏は、「私は百姓文書の職人ですから……」と笑って応じられた。

依光氏は、第一・九章を執筆されている。「高校教師……」の言葉には、いわゆる通史・通説が地域の歴史にどう貫徹しているのか、という視点を前提としながらも、一度それから離れて個別具体的な史料そのものから過去を再現する努力を怠ってはいけない、という姿勢が示されているように思う。

特に第9章「幕末の激動と野根山事件」では、前段で幕末土佐の複雑な政局を分り易く整理、その中に土佐勤王

党の興起・挫折の流れを位置づけ、さらにその流れの中に二十三士の動向を織り込めている。後段では、二十三士を主語にして、関係史料を吟味援用しつつ事件の経緯を再現、首領の清岡道之助らが最後まで「直接藩権力と向かいあい、渾身の力をふるって所信を披歴する機会」があると信じていた点を強調されている。

高橋氏は、第二・八章において藩政中期以降の田野郷浦の政治・経済等を詳解、田野の初期郷士や材木商の性格規定および寛政の浦分騒動や「安永新訴訟」の位置づけに精確な論評を加えている。また、原史料のほか筆写史料「世用日記」も随所に引用、藩政後期の浦方支配や郷分行政の実態を追究、「田野五人衆」と呼ばれた豪商の活動を克明に紹介している。

次いで、「新井来助日記」等を引いて、豪商層に限らず山師の生業の好不況までが大坂米相場の影響下にあったことを指摘し、それ故の上方経済への関心が、「先進地の知識・情報を逸早く入手することにもなり、幕末の尊攘運動が

中芸にも起るその土壤にもなったと考えられる。」と推論している。慎重な表現ではあるが、興味深い論である。

最後に、両氏の御尽力と業績に対し謹んで敬意を表するとともに、私共の

非力から町史全体の内容にまで言及できなかった点を心よりお詫びして書評に代えさせて頂く。

(学芸課長 下村公彦)

歴史散歩

小蓮古墳 (高知県指定史跡)

〈南国市岡豊町小蓮光岩〉

第一回

この古墳は、高知県立歴史民俗資料館から国道三二号線をへだてた北の山の麓に位置し、高知市の朝倉古墳、南国市の明見彦山一号墳とともに高知県の三大古墳の一つとされている。

墳形は円墳で、内部構造は横穴式石室となっている。墳丘は南北径約二十八m、東西径約二十二m、高さ約七mである。一九七一年(昭和四六)年に発掘調査を行い、須恵器、金環、鉄刀子、馬具等が出土されている。盗掘を受けているので、出土遺物は埋葬当時のもの全てではないと考えられる。この古墳が築造されたのは、六世紀後半と推定される。玄室の奥の方で大きな金環、中央部で小さな金環が一つずつ検出されている。

領石行きバス岡豊山下車、徒歩五分

(森本満子)



ニュース

歴史民俗資料館オープン

当館は、長宗我部氏の居城跡、岡豊城跡に今年五月三日にオープンした。これに先立つ五月二日、関係者を招いての内覧会と落成式典が盛大に行われた。作家・大原富枝氏の記念講演も花を添えた。

五月三日から一般の方々に公開され



秋葉祭りの妙技に、すずなりの観客たち (5月3日)

た。午前十時、中内知事を迎えて正面玄関でテープカットが行われた。アトラクションとして津野山神楽、秋葉祭りの練りも行われ、大勢の観客が詰めかけた。五月三日から六日まではゴールデンウィークの最中で、連日、展示室は大勢の人々でごったがえしていた。一日あたり平均約二千人が入館した。

五月十九日には予想を上回るハイペースで入館者一万人を達成し、一万入館の入館者には、館のコンパニオンから記念品と花束が手渡された。



歴史館行バス第1号。運転手さんにコンパニオンから花束が... (5月3日)

こんにちは



展示解説員 塩田美智子・山地通恵
金出匡代・溝渕葉子



入場者1万人達成 (5月19日)

ユア・ボイス

「むかしのようすがよくわかっておもしろかった。」(大篠小3年生)

「しりょうかんのおじさん。きのうは、わたしたちにいろんなおはなしや、せつめいをしてくれてありがとうございました。」(国府小2年生)

「想像よりはるかに技術が進んでいるのにビックリした。模型はどういうものをもとにしてつくったの。おしえて。」「もっともっと展示品を増やしてほしいです。」「あの大きなわらじのうで寝てみたい」「目にするもの一つ一つが、思わず時間を忘れて引き込まれてしまうほど興味深いものでした。多くの方が資料館を訪れてくださるよう願ってやみません。」

・・・エントランスホールの来館者の声コーナーやお手紙などで、現在までにお寄せいただいた声からいくつかご紹介しました。

私達四名は、歴史民俗資料館開館以来展示解説員としてがんばっています。ある小学校の生徒さんが観覧に夢中になり、先生の「帰りますよ。」と呼ぶ声も聞こえない様子で、ただ一生懸命メモを取っていました。そんな時、この仕事にたずさわって大変よかったです。ありがとうございました。

今後勉強を重ねて、一日も早く上手な解説ができるよう努力したいと思います。

模型はどうやってつくったのかという質問はよくお受けします。例えば「田村中世環溝屋敷群模型」は発掘調査や絵画などを、「山に働く人びと」は聞き取り調査などをもとに復元したものです。大きなわらじ(実はどうりなんですよ)は、作った岩戸集落の方も試しに寝ていました。

〔企画展の案内〕

〔歴史館日録〕

歴史と美術 土佐名品展を九月十四日より十月二十日まで一階企画展示室にて開催します。

近世の狩野派、南画、文人画を中心に土佐で活躍した画人達の足跡をたどる。中山高陽、河田小龍、徳弘董斎、松村蘭台等の軸もの、そして屏風、その他山内一豊、山内容堂、北原泰里等の書蹟も展示の予定。

入館料は一般四百円、中高生百五十円、小学生五十円。(常設展観覧料金込み)

五月二日

高知県立歴史民俗資料館落成式典神事実行委員会が神事を挙行。

五月三日

落成式典。(関係者には内覧会も行われた。)会場をサンピア高知に移し、記念講演会と祝賀会。開館式典。(テープカット、アトラクション)

五月十九日

開館記念特別展第一回寺田寅彦展開幕。

七月十四日

入館者一万人達成。

八月三日

第一回寺田寅彦展開幕。夏休み子ども歴史教室を南国市と共催。

八月八日

ハイビジョン放送設備設置。

二十一日

ハイビジョン放送設備設置。



東方朔 (中山高陽)

〔利用案内〕

開館時間 午前9時～午後5時

(入館は、午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日(祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日) / 12月28日～1月4日

入館料 一般・400円 / 中高生・150円 / 小学生・50円 (常設展示)

団体(20人以上) 割引あり (療育手帳・身体障害者へ1・2級) 手帳所持者とその介護者へ1名/長寿手帳所持者は無料)

交通機関

高知市中心部から車で約20分。

駐車場(大型バス4台・普通車50台)あり。バスを利用する場合は次のとおり。

〔県交通〕 般岡南団地発歴史館行き。終点下車。領石・奈路・田井方面行き学校分校(歴史館前)下車。

〔土電〕 新改・白木谷方面行き岡豊橋下車。(徒歩5～10分で資料館へ)

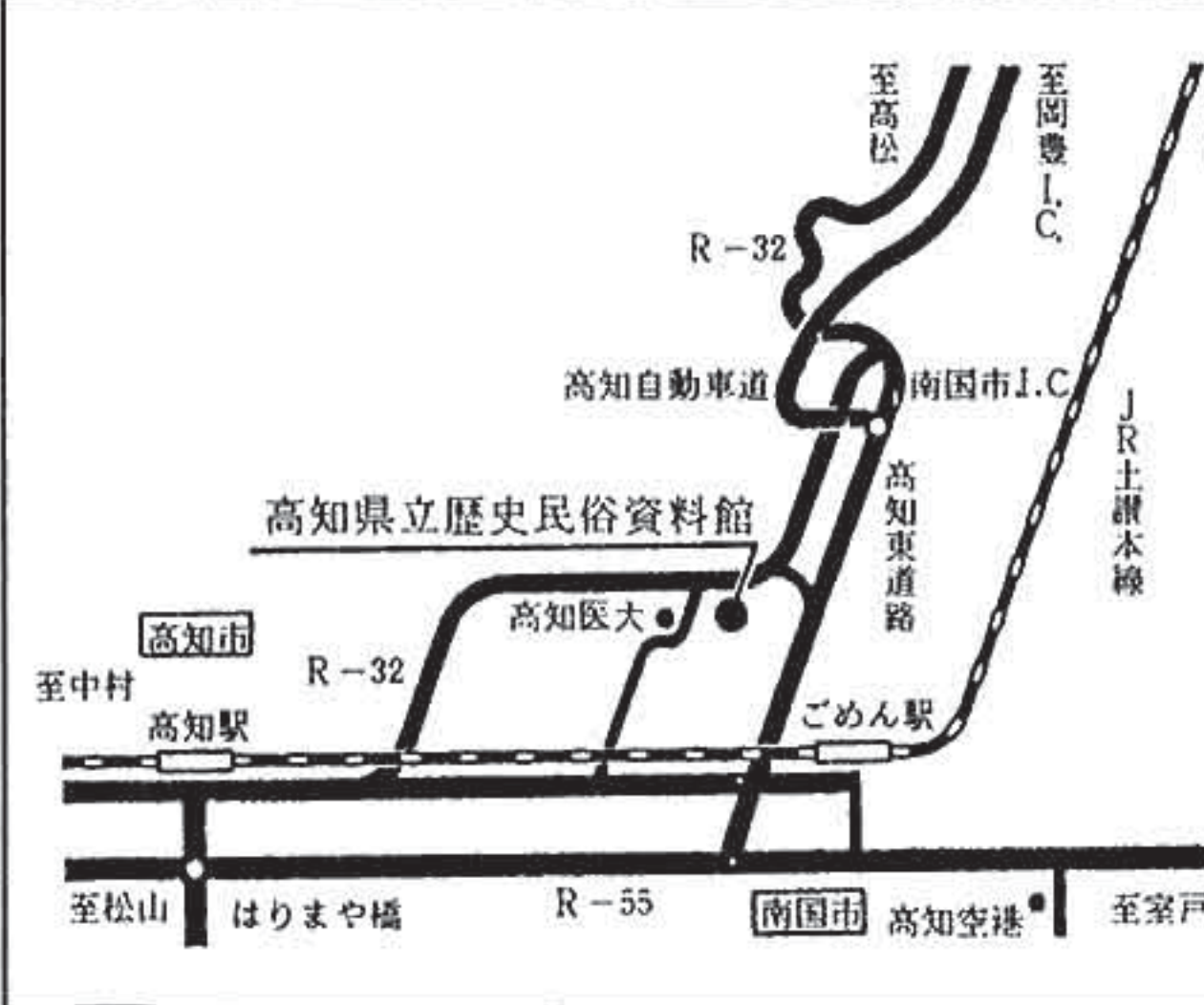
〔徒歩〕 5～10分で資料館へ (徒歩5～10分で資料館へ)

〔編集後記〕

県立歴史民俗資料館だよりが漸く創刊できた。名称は『岡豊風日』——「風日」には、漠然とした「時の流れ」といった語意が含まれている。どことなくのどかな印象を与える言葉であるが、開館初年度の我々の毎日は繁務に追われ、「風日」とは程遠い所にある。せめて、気持だけでも「風日」を大切にしていきたいと思う。

本号では、寺田家資料に関して上田壽先生の玉稿を賜わることができ、創刊号の体裁を整えることができた。第二号以下も、関係者各位の御協力を頂き、職員一同も研鑽してより充実した『岡豊風日』に育てていきたい。

(下村)



平成三年九月一日
編集・発行 高知県立歴史民俗資料館
〒783 南国市岡豊町八幡1099-1
TEL 0888-16212211
FAX 0888-16212110
印刷 川北印刷株式会社